



うである。たゞ獨りを擧ぐればシカゴのラフェル氏である。この人は考古學、人類學、史學等の造詣に深く、そして支那學に於てアメリカ學會の唯一人者であり、年齒は漸く五十歳前後將來未だ春秋に富み、大いに爲す所あらんとして居る。支那學に就いての智識は單に漢文が讀めるのみならず其の古文書即ち金石文にも通じ支那語を談じ、各方面に亘る博識より歸納して支那學の上に一家の見地を立て、居るのは吾人の反省に値する。

日本に於ける支那學者の多くが單に支那の事のみに通曉してベルシヤ、チベット、更に南方より北方蒙古等に關する研究に於て徹底を缺く憾みのあるのに對して、ラフェルは單に支那のみに限らず其の博識の考古學、人類學、史學上の智識を應用して各方面よりして支那及び其の周圍に就いての比較考察を下し、以つて論證を進めて居るのであつて、ベルシヤ地方より支那に及ぼせる影響を明かにせるなど、日本支那學者の考へ及ばざる論證を示して居るのである。しかしこの人は獨逸人の系統に屬する人であつてアメリカ人ではない、戦前までコロンビヤ大學に於て支那學を教授して居つたヒル氏も矢張り獨逸人であつた。

フランスに於ける東洋學研究——フランスに於ける東洋學研究者としては名高きシャバンヌ氏がある。シャバンヌとは二十年前の渡歐の際に既に面識を得て居るが、支那學に就いては金石文を自由に讀み下すほどの人であり、且史記の全譯を計劃されて居るほどの人であつて、たしか廿年前の會談の當時

既に同國學士院會員に擧げられたほどの篤學者である。史記の全譯も日本人が之を企てるに於てはさまで大事業ではないかも知れないが、しかしフランス人の事業として一字一句の意味が悉く明瞭にならなければ不可能なことであつて、それを讀破して更にフランス文に譯述しようといふことは却々の大事業である。さるのみならずシャバンヌは、その他にも大部の著述を企て、居るのであつて、その努力精進は驚くばかりである。そしてシャバンヌが支那に於て採集した材料は同國博物館等に保存されて居るが頗る豊富であつて、先づシャバンヌは近來有數の支那學者に教へらる可き學者である。

これに次いでハベリオ氏を擧ぐ可きである。ハベリオは年漸く四十四五、曾て北京公使館に奉職もして居たことがあり、支那語までも流麗に話す、日本の支那學者は讀むことは達者でも支那語の話せない人が多いのにハベリオは支那語に堪能な上に更に矢張り古文の金石文までも讀める、翻譯も出来る。支那以外の東洋語にも通じて居る。このハベリオが支那甘肅省の燉煌石窟より支那の古文書、繪畫、經典等を取り出したものゝ大部分を持ち歸つたのが今フランスの各博物館圖書館等に收められて居る。しかし、その貴重なるしかも豊富なる資料に對し未だ整理の能くされて居ないのは遺憾であるが、戰勝國であり乍ら疲弊の甚しいフランスの經濟界は之を如何ともなす事が出来ない始末なのである。ハベリオ自身は予に語つて、「いまにどうにかなるであらう當分の間この儘にうちやつて置くより外に仕方がない」と言つて居たが、眞に氣の毒である。アメリカは金があつて材料に完備を見せ乍ら之を讀む人が無いのに、

フランスに來れば、ペリオの如き見識を有する人が居り乍ら金が無くて如何ともすることが出來ない状態を告げて居る。出版したくもそれも駄目だといふので、日本より資金を仰いで出版しようかといふ計劃もある。

附言、丁度アジア學會の記念祭がパリで行はれたが、列席した自分が散會の後彼地の學者たちより我が國の梵語學者高楠順次郎博士の著述の「佛教大辞典」其の他にもいま一つの著書が出て居るならそれを佛譯して、更に意見をその上に立て、みたく思ふからその由交渉してくれないかとの話を受けた、しかし自分はさやうな著書を高楠博士が出されて居るを未だ知らない旨を語り、去つてイギリスにいたり、その「佛教大辞典」とは織田得能氏の著述であることを知り彼地學者たちの誤聞を知つたが、しかし何れにしても日本人の著述の外國語に譯されるのは宜いことであるを思ふてかゝる事業に讚意を表して置いた。

イギリスに於ける東洋學研究——こゝにはスタイン氏が居る。其の燉煌方面より蒐集した材料は貴重なものである。スタインはイギリス人ではなくハンガリー人であつて、英領印度に雇はれて居た關係上、中央アジアに於ける發掘を遂げその第一回の報告を今より卅五年前ドイツのハンブルヒに於て發表し、更に大規模の探検をしたのであるが、その結果はイギリス本土及び英領印度のカルカッタに二分されて收められた。こゝは經濟状態も疲弊して居ないから整理も出來、出版も見られる。

オランダに於ける東洋學研究——予はこの國と及びスペイン、ポルトガル及びイタリーのバチカンに收められてある日本に關する古文書を此の度の旅行に於て採集すべきを大なる目的としたものであつた、さればオランダに入るや其の首府のヘーグに到り國立の圖書館にして古記録類を藏するところを尋ねてみた。そこには、日本に關する古き記録類が二十米平方の壁間に一杯に陳べられて居た、支那に關するものは其の四分の一の五米平方に陳べられてあつた。しかしかほゞ夥多なる材料を如何にして取るを得べきかを考へて、それが非常に金を要するを思ひ——(寫真に寫して持歸る可く計算して見ると一枚我が國の金にして卅五錢を要し、全部を寫せば實に數萬圓となるので折角交渉したが何れその費用を得てからといふことにして) 思ひ止つて、更に同じくスペイン、ポルトガルにもあまた在る可き日本に關する古き記録の持ち歸りも思ひ止つたが遺憾に思ふ。敢行せんには實に十萬圓以上の巨額に上るを要するのである。さて、オランダに於ける東洋學者としては、フイツァー氏を擧ぐ可きである、フイツァーは日本學支那學に造詣深く先づフロート以後の一人者であらう。しかし丁度折悪く病臥中との由にて親しき面談は得られなかつた。

ドイツに於ける東洋學研究——ドイツが如何に經濟上の荒廢を來して居るかは眞に同情に堪へざるほどで學者は己が持ち物を賣却して僅かに立つてゆくといふが如き始末である、これは従つて東洋學研

究にも影響して、第一外國より書物を購入することが出来ないで、全く話にもならないほどである。さればルコック氏の如き支那の新彊省あたりより撥掘せる貴重なる材料を擁して、南北朝隋唐時代に於いて、ベルシヤ(西域)方面よりの影響が支那西部に及べる事情を明らかにすを得ても之を出版して世に問はんとするに資力無きを憂ふるのみである。

イタリーに於ける東洋學研究——バチカンの法王廳にある日本に關する古き文書は唯瞥見に止めた。即ちオランダのヘーグに於て辛い經驗を嘗めたれば、こゝでは始めより一瞥を與へんのみで尋ねたのであるが、それは却々多く在つた。しかし、オランダのヘーグに於けるが如く、整理が行き届いて居ないからその混雜の裡より擇み出すのは大いなる事業である。尙バチカンの外にもたとへばゼノア、ヴェニス等にも日本に關する古き文書は見る事が出来るが、これも如上の言葉通りであつて、もし他日留學生が此の所に來つて熱心に緻密に精査してくれるならばと痛感したのである。

さて、イタリーも獨佛其の他と同じく戦後の疲弊が甚しく、爲にポンペイの撥掘もその報告が出来ない状態に在る。斯の如き状態の下に在るのがイギリスを除く歐洲各國の東洋學研究の現況である。材料は豊富に、而もアメリカの如く之を運用すべき學者の輩出無きには非ず、しかも唯資金に空しきが故に發表も報告も整理も出來ずに居るのである。イギリスとアメリカを除いては、歐洲大陸の東洋學者は現在の状態に於ては、アジア方面に探検隊を出すか如き事業を全く能くするを得ないのである。

エチプトに於ける東洋學研究——ナイル河畔の發掘は我が國の新聞にも最近報道されたるが如く、今尙、而も將來に於ても益々かゝる發掘事業は行はれ、しかもその結果は相當の收穫を得るであらうことを信ずる。但しエチプトに於ける發掘は現在のごころイギリス人とアメリカ人との手に於て行はれて居るやうである。そのうちアレキサンドリアに居るイギリス人のペットリー氏が名高い。ペットリーは有數なエチプト學者である。

さて歐米に於ける東洋學研究の狀勢を觀來つて感ずることは、それらの研究報告を日本人が讀破し、更にその上に立つて其の不備なる点を補修して日本人としての一見地を立て、以て世界の學界に雄飛すべきことである。先づ彼地諸國の學者にして東洋アジアに關する著述をなしたるものを、我に收めて、その上に更に批判と補修とを下す可きである。予はかゝる意味より今回の巡視旅行に於て出来るだけ多くの材料を蒐集すべく巡遊各地に於て外人の著書を購入し來つたのである。更に所感を述べれば、從來日本の學會の傾向は、何でも西洋人の著述を翻譯すれば事足れりの主義であつたが、それではいかぬのである。殊に東洋學研究の如きその主義では一步を常に遅れて行かねばならないのである。

更に第三には、かくして日本に於ける東洋學研究の狀況を外國諸地の東洋學研究に知らしむるの要がある。殊に彼地の學者たちは財政上の急迫によつて研究上に困難を來し遅々として居るのであるから、その必要は大いにありであらねばならない。